

協力隊活動を通してカンボジアからいただいたもの

小杉 智代

(16-1, カンボジア, 家政, 八王子市立高尾山学園)

1 カンボジア紹介

カンボジアというと、世界遺産のアンコールワットや、地雷のイメージが強いと思うが、ここでは私が暮らして感じた印象を伝えたい。

(1) 言語について

クメール（カンボジア）語が日常的に使われている。英語も首都プノンペンや観光地のシェムリアップにおいては使えるが、活動先ではクメール語しか使わなかった。それは、私の赴任地のバタンバン中等教員養成学校の担当したクラスの生徒や同僚指導教官は英語を話せる数少なく私自身も苦手であったためと、英語で教えるための教材も充実していなかったためだ。また、市場や大家さんと話すなど日常もクメール語しか使えなかった。

(2) 医療事情

南部では「鳥インフルエンザ」、北部では「デング熱」が流行することもあったが、私は大病をしなかった。しかし、食べ物に気を使っても下痢が止まらず6キロの体重減になった。半年経つと、何を食べても大丈夫になった。

(3) 生活事情

カンボジアでは自分で住居を探し安全点検を行った後に入居するため、探すのに苦労はするが住環境はとてもよい。衣服はクメールスカート（巻きスカート風のロングスカート）がカンボジアの女性の服装だ。現在は学校ではよく着るが他の場所では男女とも洋装を多く目にする。食事は米が主食で、それに一品のおかずが一般的。朝食ではクイティユ（米のめん）もよく食べる。日本にある食材も豊富で、物価は日本のおよそ10分の1くらい。

普段の交通手段は自転車かモトドップ（オートバイタクシー）、長距離移動はバスが主。首都プノンペン～バタンバン（赴任地）は5時間。交通規則を守らない人も多く、逆走もするので交差点での事故が多い。治安状況はよくなりつつあるが、夜には都市部は外国人を狙った犯罪が多い。地方は都市部に比べ少ないが、場所により異なる。

(4) 私の周囲のクメール（カンボジア）人々の暮らし

カンボジアでは農業をしている人たちが圧倒的に多い。赴任地のバタンバンは米どころとして有名で日本米にとっても似ておいしい。もち米を少し混ぜて炊けばおにぎ

りが作れるくらいの品質。雨季米と乾季米があり、場所によっては二期作をしているところもある。

クメール人は仏教徒が多く正月や盆に寺参りをするなど年中行事や冠婚葬祭を大事にしそのために仕事を休むのは当たり前である。中秋の名月の時期にはボートレースがあり、夜には灯籠流をし、先祖を供養する。クメール人が好んで話すことはお金の話。日本人が挨拶と天気の話をするのと同じくらい頻繁にお金の話題が行き来する。

小中学校の教員の給料は\$30ほどで極端に少なく副業をしないと生活が成り立たない。指導教官は基本給に授業時間数によって歩合制の月給となるので教員よりは良い。

一方、日雇い労働で1日働いて得られる現金収入は\$1。これでは1日の食事代もままならない。

2 活動について

(1) 配属機関

バタンバン中等教員養成学校は2年制の教員養成学校。カンボジア国内には6ヶ所あり、学生は高校卒業以上で合格すると同時に就職扱いとなり、2年後には近隣の4州の中学校・高等学校の教員になる。学生は必ず2教科の免許を取得することになる。バタンバンの場合、家庭科は第2教科で国語が第1教科。履修科目は取得免許の教科に加え、英語や芸術・体育などの一般教科も含めて平日は7時間、土曜は4時間の計週39時間学習する。赴任当初は教育実習期間が第2学年の1月末～3月末の10週だったが、現在は教育実習のシステムが変わり第1学年でも実施されている。

(2) 要請内容

私は2代目で初代のときと要請内容は同様で、家庭科の指導教官として楽しい実習授業（ミシンを使った被服実習・調理実習）を学生に直接指導することであった。しかし、活動する中で同僚指導教官への技術移転や、他州での指導教官へ技術移転や環境整備、そして他州の学生たちへの直接授業の必要性を感じて加えた。

(3) 活動の4つの柱と設定理由

① T1授業の実施

前任者から受け継ぎ、実施していない内容を中心に行った。若い生徒は柔軟に私のやり方を受け入れていた。

② T2授業の補助

同僚指導教官の教えている内容を知り、実技ではより良い方法や新しい方法を教え、学生が教員になったときの授業実践で役立ててもらいたいと思った。

③ 教室・備品整備

前任者が苦勞して準備した備品が活用されるよう、修理や点検・整備のノウハウを残し、今後も活用するために必要だと感じた。

④ 他州での協力

1年経った夏季休業中に各校を見学し、他の学校の家庭科の指導教官も専門教科

ではなく生物や国語の指導教官が行っていることがわかったためだ。

(4) 活動内容の実際

① T 1 授業の実施

各クラス週 2 時間ずつ実施した。1 年ではミシンの基礎縫い・食物分野の知識分野を補いながら調理実習を行い、2 年ではミシンを使った被服製作と調理実習と知識分野の復習を行った。また、カウンターパートの不在のときには休講になってしまうため、振り替えて積極的に授業を行った。カウンターパートが不得意な分野は教科書や指導書の内容を写すだけの授業になるので、実習以外の知識に関すること（例えば食品添加物の授業）も行った。カンボジアのカリキュラムを訳してみても、日本の指導要領と似ている部分がたくさんあることがわかり、現職としての経験がとても役に立った。

② T 2 授業の実施

同僚指導教官が行う授業を学生・指導者の目線で見学し、実習授業では刺しゅう、編み物などで新たな種類やよりよいやり方を紹介した。また、学生がの教育実習では中学校に足を運び生徒に助言するとともに、中学校の先生方とも意見交換を行った。

③ 教室・備品の整備

使われていなかった壊れたミシンの修理を行い、生徒増に伴って足りなくなった教室を新たに新設した。また、棚に飾ってあった作品は指導教官のものがほとんどだったため、生徒の作品を飾るようにした。

④ 他州での協力

長期休業を利用して他州の中等教員養成学校を見学し、要望に合わせてミシンの修理や、講義・実習の単発授業を行った。

(5) 活動の成果と反省

① T 1 授業の実施

200 時間以上実施し学生に還元されたものは多かった。教育実習では学生も実習授業を行っていたため、少ない材料・施設でも実習は可能だと分かった。同僚指導教官が必要以上に隊員を便りにするようになったことが反省点として残る。T 1 授業を行ったことは学生のためにはよかったが、同僚指導教官には見本を見せられたよい面と、隊員任せになって仕事が楽になってしまったという両面があったことが否めない。同僚指導教官の生活状況や性格を知り、兼ね合いを考えて進める必要があるだろう。

② T 2 授業の補助

同僚指導教官は新しい技術に対して食欲に吸収しようという姿勢があったため、私がすることにも熱心にメモを取ったりやってみたりしていた。ただし、給料の問題が大きいと思うが時間外に残って仕事をしようという姿勢はなかったので授業の中でこのことに止まって発展しなかったのが残念である。しかし、私自身にとっては

役立つことが多かった。全ての授業を見ることで指導教官の指導法や内容、学生の取り組む様子もわかり T1 授業に生かすことができ、必要に応じて助言もできた。

③ 教室・備品整備

美しく教室を飾り、形を整えることは校長も推奨していたので成果があがった。ミシンの修理代を全額学校負担という形で行え、修理先も同僚指導教官が探して発注・交渉・立会いができたことには学校側の意識を高める意味でもよかった。しかし、形を整えようとする余り、訪問者が来るときだけ過剰に整備を行ったり、元々の備品の品質の悪さが問題であったりするため、根本的な解決にはいたらない。また、私が意外に感じたことは、「クメール人は思ったよりも物を大切にしない」ということだ。折に触れて捨てないことや再利用すること、活用することの大切さを説いたが今までに培った意識を変えるのは難しかった。

④ 他州での協力

カンボジアは援助大国である。今は多くの国による N G O の力を借りることは必要かもしれない。しかし、最終的にはクメール人同士で助け合うことが一番よいと感じ始めていた。そのため、同僚指導教官に別の州の家庭科指導教官を育ててもらおうと思って計画した。しかし、中等教員養成学校はそれぞれ独立しており中央で統括しているというシステムがなかったのと、お互いの領分を侵さないという考えがあること、また研修を行うことに際して呼ぶ側は交通費や日当を支払うのが普通であること、隊員が所属地を越えて活動することなどの問題点がたくさんあった。結果的には、所属長を説得し、隊員のみで州を越えて活動することには了解が得られ実施できた。しかし、現在でも私が教えたことを同僚が広める方が効率としてよいだけでなく、お互いの意識も高まるという思いが残っている。他州の校長・指導教官・学生には喜ばれたのでよい足がかりにはなったと感じている。システム上の問題が解決されることを今後に期待したい。

3 活動を振り返って

現在、強く感じていることは、現地の生活を知ること、人々を知することは必ず活動に役立つということだ。良い思いをしたのも苦い経験をしたのも人間関係だった。協力隊活動は大切だが私も現地に暮らす一人の人間として日々様々なことを感じる中で活動できたことが大きかった。また、先に述べたように現在のクメール人は援助慣れしてしまっているように感じてならない。お金や物をもらえる外国の N G O もたくさんあるからだ。しかし、私は地道な人材としての技術協力を徹したことで見えたことも大きかった。クメール人のやり方の良さも見え謙虚な気持ちになり、改めてカンボジアの教育問題を客観的に見られた。

最後に、私を支えてくれた多くのクメール人や隊員仲間、そして日本の応援者たちへ感謝の気持ちを込めて「オークン・チラーン！（ありがとうございます）」と記したい。